

新技術受注へ技術見せる

諏訪圏工業メッセ閉幕

米中貿易摩擦と海外経済の減速で景気後退が現実味を増す中、17、19日に諏訪市で「諏訪圏工業メッセ2019」が開かれた。先行き不透明感から設備投資が減少し、精密加工を手掛ける諏訪地方の製造業でも業績が悪化する中小企業が目立つ。出展企業は新規の受注先を開拓しようと、自社の強みを前面に出してアピール。海外企業を招いた商談会では、販路拡大を目指して独自技術を売り込んだ。

（渡部雅隆、小山哲史）
【関連記事29面に】



業績悪化目立つ諏訪の製造業

ユニークさより「強み」前面

「多様な試作・量産に対応します」。切削加工の牛越製作所（岡谷市）は、多彩な加工機で試作から量産までワンストップで対応できる技術力をパネルにして展示。自社の特徴を3分ほどでまとめた動画もパソコン画面で示し、東京都内から訪れたメーカー担当者に熱心に売り込んだ。空気圧で動くアーム型ロボットなどユニークな展示で来場者を毎年楽しませてきた同社。牛越弘彰社長は「今年は本業の切削加工を前面に打ち出した」と話す。19年5月期の売上高は約9億7千万円。約4割を占める半導体関連装置部品の受注が今春から半分に減少している。巻き返しを狙うのが量産品の新規受注。「メッセで新規案件を獲得したい」と力を込めた。

試作から量産まで手掛ける対応力をアピールした牛越製作所のブース

2万7841人が来場

19日閉幕した「諏訪圏工業メッセ2019」の実行委員会は、同日までの3日間の来場者数が延べ2万7841人定。

「いや、意気込んだ。同社はこれまで「究極のエコカー」として期待される燃料電池車の関連部品などを展示。先端分野もカバーする高い技術力を強調していたが、今年は並べた部品点数を増やし、溶接やプレスといった幅広い技術の高さが伝わるようになった。同社の売上高は18年1月期が約16億円で過去最高となったが、19年1月期は中国向けの半導体関連装置部品の受注が低迷し、14億8千万円に減少した。平出社長は「受注が減少した今だからこそ、開発力を強化し、取引先の裾野を広げたい」とする。

自動車部品を中心に手掛ける共進（諏訪市）は、過去の

きたが、ここ数年は主力のエンジン部品や変速機部品の展示に力を入れる。昨年末から中国向けの自動車部品受注が減少。電動化や自動運転といった技術を使う次世代車への対応も課題になっている。

「昔のメッセでは会社名を売り込むだけだったが、今はビジネスにつながることも目的。何が一番いい展示なのかは永遠の課題」と五味武嗣社長。今回のメッセでもメーカーや商社の担当者や商談を重ね、部品の実物を示して技術力を伝える現状の展示に一定の手応えを感じている。

精密はね製造のミクロ発條（同）は、半導体の検査装置に使う外径0・072ミリの微

成長見込む新興国に注目

日本貿易振興機構（ジェトロ）長野貿易情報センター諏訪支所が海外企業を招き、メッセ会場で3日間にわたって開いた商談会。今回はベトナム、インドネシア、インド、ロシア、メキシコの5カ国から工作機械や機械部品を扱う商社などの担当者が来場。海外市場に活路を求め、諏訪地方の企業が商談に臨んだ。

「実用性の高さが売り。いつでも声を掛けてほしい」。金富熱処理を手掛ける岡谷熱処理工業（岡谷市）の滝沢秀一社長は、メキシコの商社との商談で、プレス用金型を熱処理する際に生じるゆがみを低減する独自技術を紹介。商社の経営者は「これこそ技術革新。評価の高い日本の技術の活用を取引先に促したい」と興奮気味に話した。

岡谷熱処理工業の足元の売上高は、米中対立の影響で前年水準を下回る月が目立つ。海外企業との取引には減っており、20年12月期の売上高が前期比で3・4割落ち込む。メキシコとインドネシアの各商社、ベトナムのメーカー兼商社とそれぞれ商談した工業用洗浄機製造のクリンビー（諏訪市）も中国向けの受注が